



とつとつ ダンス

2022年度
活動報告書



一般社団法人 torindo

点描としての<とつとつダンス>

<とつとつダンス> 2022 年度活動報告書

●目次

P. 1 点描としての<とつとつダンス>

P. 2 年表・13 年間の歩み

P. 3 年表・2022 年度の歩み

P. 4 マレーシア⇄日本をつなぐオンライン・ワークショップ

P. 6 マレーシア渡航期間中の活動記録

P. 9 アンケート分析

P. 10 マレーシア渡航日記

P. 11 2022 年度活動報告展示会

P. 12 OriHime がもたらした感覚と映像編集

P. 13 インタビュー：石田 智哉 × セシリア・チャン

P. 15 視察訪問

P. 16 インタビュー：砂連尾 理 × カマル・サブラン × 神村 恵

P. 18 終わりに

思い返してみると、<とつとつダンス>ということばを生み出したのは 2010 年の砂連尾理で、京都府舞鶴市主催の舞台公演のタイトルだった。当時の砂連尾さんはクリエイションのために大阪から特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるに 4 ヶ月間週 1 で通っていた。

「踊りませんか」と砂連尾さんは認知症の入居者を誘っていたけど、自分がダンサーであることをまったく誇示しない。職員さんたちは砂連尾さんの正体を掴みかねて困っていたし、ようやく一緒に身体を動かしてくれた入居者からも「こんなのはダンスじゃないっ」と激しく怒られたりしていた。それでも砂連尾さんは認知症の高齢者たちを毎回ダンスに誘い続け、そのうちにかれらはぼつりぼつりと一緒に踊りはじめていった。

気づけば砂連尾さんはグレイスヴィルまいづるの風景となり、入居者、職員を巻き込んだ 2010 年の公演「とつとつダンス」、2013 年、2014 年の巡回公演「とつとつダンス part2: 愛のレッスン」へとつながっていった。2010 年以降、グレイスヴィルまいづるでの砂連尾さんの月一回のダンスワークショップは現在まで 13 年間続いている。そして、哲学者、文化人類学者、美術家、映像作家をも取り込んで静かに続くその営みの総体を、ぼくらはいつの間にか当たり前のよう<とつとつダンス>と呼ぶようになった。

2010 年の舞台公演の際に美術家の伊達伸明が<とつとつダンス>について記した詩がある。

「とつとつな音」 (伊達伸明)

目標達成欲の強い人は、とつとつが許せない。

それが発展途上に見えるから。

仕切るのが好きな人は、とつとつが許せない。

それが牛歩戦術に見えるから。

オチがないと気がすまない人は、とつとつが許せない。

それが阿吽の呼吸に依らぬから。

若さの秘訣は?などという人は、とつとつが許せない。

それが身体の限界に見えるから。

未整理の過去と手探りの未来との間に

点描でしか描けない現在がある。

それを描く音、とつとつ

<とつとつダンス>は、この詩にあるように、丁寧な「その場そのとき」を 13 年間ポイントし続け、とつとつと広がり、色鮮やかな点描画となった。300 回以上続いてきたワークショップがポイントされた点にひとつとして同じ色・形はない。いつも新鮮で、だから飽きることなく現在も続いている。

そして 2020 年<とつとつダンス>はマレーシアのサウンドアーティスト カマル・サブランとオンラインで出会い、2022 年マレーシアの地を訪れることになった。舞鶴からの連なりが生み出すこの不思議で静かなダンスの点描はこれからどのような情景として広がっていくのだろうか。

一般社団法人 torindo 豊平豪

2009年から始まった「とつとつダンス」。特別養護老人ホームでの開催からオンラインへ、オンラインから国内を飛び出しマレーシアへ。13年間の歩みを振り返る。

- 2009年
 - 12月 砂連尾理*1が京都府舞鶴市主催のダンス作品制作のためにグレイスヴィルまいづる*2でのクリエイションをはじめる。
- 2010年
 - 3月7日 ダンス公演「とつとつダンス」(会場：舞鶴赤れんが倉庫)
 - 4月 グレイスヴィルまいづる主催で月一回の「シリーズとつとつ」*3がはじまる。
- 2014年
 - 3月 ダンス公演「とつとつダンス part.2 — 愛のレッスン」舞鶴公演(会場：舞鶴赤れんがパーク)
 - 10月 ダンス公演「とつとつダンス part.2 — 愛のレッスン」大阪公演(会場：アートエリア B1)
 - 11月 ダンス公演「とつとつダンス part.2 — 愛のレッスン」東京公演(会場：アサヒアートスクエア)
- 2015年
 - 1月 ダンス公演「とつとつダンス part.2 — 愛のレッスン」仙台公演(会場：せんだいメディアテーク)
- 2020年
 - 5月 「とつとつダンス」オンライン・ワークショップがはじまる。
 - 11月 カマル・サブラン*6を迎えて、シンポジウム「とつとつダンス オンライントーク・セッション — 認知症高齢者とのダンス・音楽によるコミュニケーションの可能性 —」開催(会場：YouTube ライブ)

*1 砂連尾理 (ダンサー・振付家)
 <とつとつダンス>の名付け親。病、障害を〈生きる過程にある変容〉と捉え、対話を通じたダンス作品を制作する。

*2 グレイスヴィルまいづる
 京都府舞鶴市の特別養護老人ホーム。

*3 シリーズとつとつ
 グレイスヴィルまいづる施設入居者および職員、地域住民向けの、砂連尾理によるダンスワークショップ、西川勝*4の哲学カフェ、豊平豪*5の文化人類学カフェなど、とつとつダンスに関連するワークショップ群。

*4 西川勝 (臨床哲学者・看護師)
 <とつとつダンス>では対話の場のファシリテーションを務めてきた。現在は「認知症コミュニケーション」の研究を行いつつ、哲学カフェ等の活動にも取り組む。

*5 豊平豪
 (一般社団法人 torindo 代表理事)
 専門は文化人類学。2009年から砂連尾と共に高齢者施設に通っている。

*6 カマル・サブラン
 (サウンドアーティスト・研究者)
 アートと健康・福祉の分野に関心があり、マレーシアにてヒーリングアートやアルツハイマー病患者のためのサウンドスケープなどのプロジェクトを行う。

- 2022年
 - 6月 日本チームの制作ミーティング*7を初めて実施
 - 7月 マレーシアチームとのオンラインミーティング。日本 - マレーシアのスタッフが初めて顔を揃える。セシリア・チャン*8と初顔合わせ。マレーシア現地で行うパフォーマンスのクリエイションをグレイスヴィルまいづるとオンラインではじめて実施。
 - 8月14日 マレーシアと日本を繋いだオンライン・トークセッション開催。
 - 8月28日 マレーシアと日本を繋いだオンライン・ワークショップ。神村恵*9が初めて参加。以降、マレーシア向けに12月の渡航まで毎月1回全5回のオンラインワークショップを開催。

● 12月24日～2023年1月3日 <とつとつダンス>日本チーム、マレーシアへ渡航。

- 12月26日 公開ダンスワークショップ(会場：バガン病院高齢者ケアセンター)
- 12月27日 芸術学部の学生に向け講義(会場：国立マレーシア科学大学 [USM] 芸術学部)
- 12月29日 IPOH HEALING ARTS FESTIVAL 参加(会場：P.O.R.T)
- 2023年
 - 1月2日 Public Workshop Totsu-totsu Dance 開催(会場：バガン病院)
 - 2月25日 2022年度活動報告展示会開催(会場：さいたま市文化センター)

● 2023年2月21日～2月26日 マレーシアチームと共に日本の認知症介護における事例を視察するため福祉施設を訪問。ワークショップも開催。

*7 制作ミーティング
 毎週1回日本チームによる制作ミーティングを実施。またマレーシアチームとの制作ミーティングも毎週1～2回実施した。

*8 セシリア・チャン
 ジェロントロジスト(老年学博士)。数々の高齢者福祉サービスや施設のコンサルティングを行う一方、認知症者や家族、介護者のサポートのための地域支援グループ「Living Beyond Dementia」を立ち上げ、認知症の理解のために活動中。現在、バガン病院高齢者ケアセンター勤務。<とつとつダンス>では、ワークショップに数多くの参加者を紹介。精力的に情報発信を行なった。

*9 神村恵
 ダンサー。2004年よりソロ作品を発表。これまで、イタリア、韓国、インドネシア、フィンランド、英国など国内外の様々な場所でパフォーマンスを行う。近年は、言葉と動きの関わりに関心を持ち、それらの中で変換を行う仕組みを利用した作品などを制作。

2022年度6月よりプロジェクトを開始。8月からオンラインワークショップをスタートした。

マレーシア⇄日本をつなぐ オンライン・ワークショップ

マレーシア現地でのワークショップに向け、全6回、日本とマレーシアの参加者たちを繋いでオンラインのトークセッションやワークショップを開催した。現地で高齢者向け福祉施設も運営するセシリアが紹介し、参加者、演奏を担当するカマル、そして砂連尾理。それぞれ別々の場所から顔を合わせ、徐々に関係性をつくっていった。

● 2022年8月14日

初回は、認知症の家族をケアする方に加え、マレーシアや日本の福祉施設に勤務する方など、170名の方が集ったトークセッション。マレーシアは平均年齢が30.26歳（2020年時点）と若い国。セシリアからは、マレーシアでは認知症が「医療」の側面からの

み語られがちであること、ケア施設が少なく家族によるケアが中心であることなどが報告された。「とつとつ」の、ケアでもなくアートでもない取り組みが、マレーシアではどのように受け入れられるのか手探りのスタートとなった。



● 2022年

8月28日

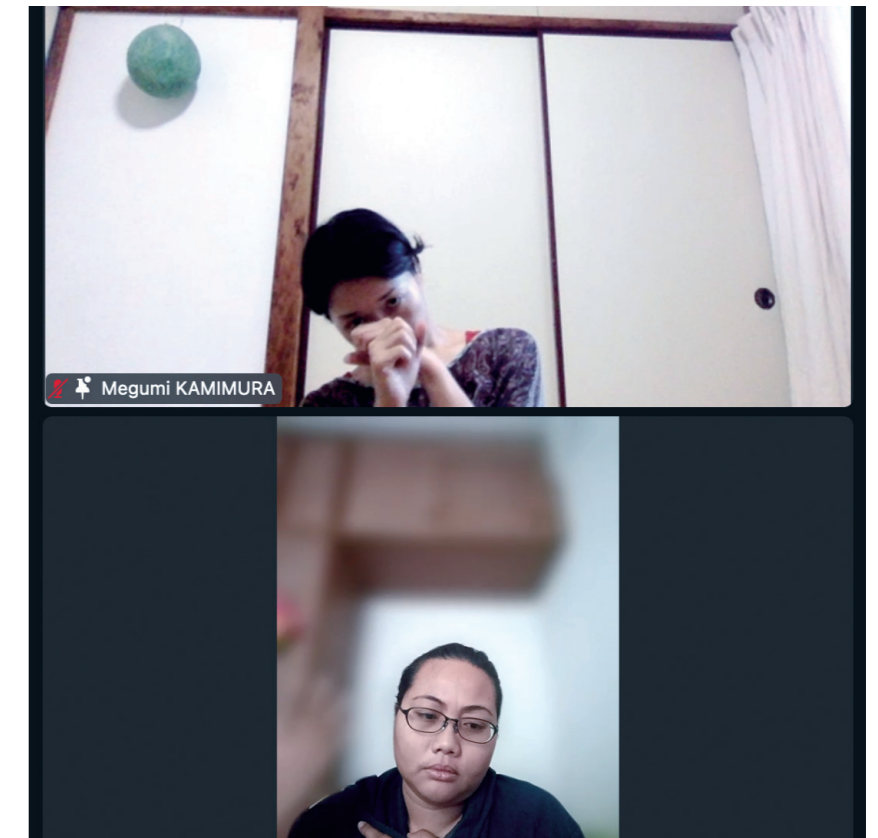
砂連尾さん、神村さんと参加者によるダンスワークショップ。相手の動きを鏡のように真似する「ミラーリング」の動きや、言葉にはならない「声」で相手と会話しあうセッションなどを、カマルの音楽に乗せて行った。認知症の母親と介護者である娘が参加。



● 2022年

9月4日

本格的にワークショップスタート!と思いきや、残念ながら予定していた認知症の方は体調不良でお休み。急遽、マレーシアでケアにあたっているご家族や介護士の方を交えたトーク&ワークショップとなった。ここでも「眠気を誘発する投薬治療以外の選択肢をみつきたい」との切実な声が聞かれた。急な変更にも臨機応変に対応できるのが「とつとつ」の良いところ。



● 2022年10月2日 ● 11月13日 ● 12月3日

マレーシアでじわじわと「とつとつ」の輪が広がり、12月に行う現地でのワークショップに向けた準備を開始。興味を持っていただいた方に声を掛け、継続的な参加者が増えていった。

合計参加者数:50名

マレーシア渡航期間中の活動記録

2022年12月24日から2023年1月3日にかけて、砂連尾理をはじめとした日本の制作チームがマレーシアに渡航。このページでは、各訪問先での活動について紹介する。※記録映像を担当する石田智哉は体調不良のため急遽分身ロボット「OriHime」で遠隔参加することになった。

● 公開ダンスワークショップ

日時：2022年12月26日

場所：バガン病院高齢者ケアセンター
(ペナン州バターワース)

進行：砂連尾理、神村恵

参加者：高齢者ケアセンターに通う高齢者、
介護者や、音楽療法に取り組む学生ら、21名
コーディネーター：セシリア・チャン

概要：高齢者ケアセンターを会場に、バターワースやペナンに住む認知症高齢者、介護者らに向けて<とつとつダンス>の事例を紹介。その後、ストレッチやペアでのマッサージを経て、リーダー、フォロワーという役割分担をしながら相手の動きをまねたり、触れ合わずに相手と動きを合わせていくワークを行った。

神村コメント：ワークショップ終了後、参加者からは「これは何のためにやるのか」という質問があり、しばらく議論が続いた。砂連尾さんからは「意味のない世界を遊ぶため」という答えが返される。共有されたルールがあると、安心して動きやすいが、それなしの状況でどう動くかを探っていく。



● 芸術学部の学生に向けた講義

日時：2022年12月27日

場所：国立マレーシア科学大学 (USM) 芸術学部
(ペナン州ニボンテバル)

出演：砂連尾理、神村恵、カマル・サブラン

参加者：USMに通う学生100名
コーディネーター：カマル・サブラン

概要：学生が主体となって取り組む講義形式の特別授業。伝統舞踊で歓迎を受けた後、<とつとつダンス>の背景にある思いや魅力などについて紹介。後半では砂連尾、神村、カマルによる学生も巻き込んだワークショップや音楽とダンスの即興セッションが行われた。

神村コメント：ほぼ何も決めていないまま始まる。このようなインプロセッションは一体何年ぶりだろうか。カマルと砂連尾さん、私が互いに探り合い反応し合いながら、その場でやるべき「仕事」のようなものを見出していく。学生を徐々に巻き込み、さまざまな切り口でコンタクトするような時間。



● IPOH HEALING

ARTS FESTIVAL

日時：2022年12月29日

場所：P.O.R.T (ペラ州イポー)

コーディネーター：カマル・サブラン

概要：イポーにあるオルタナティブスペース「P.O.R.T」で開催されたヒーリングアートをテーマにした複合イベント。電子楽器の体験ラボ、学生によるアート療法に関する研究発表、ライブパフォーマンスからなり、砂連尾はアートトーク、パフォーマンスに出演。



ART TALK / WORKSHOP

出演：砂連尾理、浦岡雄介、カマル・サブラン

オンライン出演：近藤キヨエ、仲井なるみ

参加：学生、医療従事者、認知症に関心のある人など104名

概要：アートトークでは「グレイスヴィルまいづる」の入居者・近藤さんと看護師・仲井さんとオンラインワークを実施した。砂連尾の招きを受けて、現地来場者も近藤さんとのセッションに参加。日本で行ってきたマレーシアとのオンライン参加者だったアイリーンも即興的にその場に加わって、近藤さん、アイリーン、その他の来場者が相互に動きを感じ合いながら動きの起点を行き来する、大きなひとつのセッションへと発展していった。

砂連尾コメント：セッション序盤はただお互いの動きをトレースしあいながらの動きだったのが、時間を重ねていく内にアイリーンが乗ってきて、彼女の内側から誘発される動きがどんどん生まれてくる。セッション後、アイリーンは「動きながら、昔、日本の踊りを習っていたことを思い出し、その動きをやったのだ」と語ってくれた。身体の奥底に隠れていた遠い記憶が、一緒に踊ったり話したりすることで、思い起こされ語り出したりすることは「グレイスヴィルまいづる」でも経験があった。

HEALING PERFORMANCE

出演：砂連尾理、カマル・サブラン、

石田智哉 (OriHime パイロット)

参加：学生など97名

概要：パフォーマンス前半は砂連尾と日本から石田が遠隔操縦するOriHimeが観客と共に踊り、最後は無音の中、砂連尾のソロパフォーマンスが行われた。パフォーマンス後半は屋外ステージへ。カマルの即興音楽が生み出す静謐な空間のなか、砂連尾がステージの上に留まらず、会場の隅々を動き回りながら展開するパフォーマンスを展開。観客はその様子を固唾を呑んで見つめていた。

砂連尾コメント：カマルの音楽や観客とだけでなく、会場付近の木々や会場内の床にステージ、また音楽が流れるスピーカーや天井の電灯や扇風機など、会場内にあるさまざまなものとこの身を交流させながら踊る。終了までの20分間があっという間だった。

● Public Workshop Totsu-totsu Dance

日時：2023年1月2日
 場所：バガン病院（ペナン州バターワース）
 進行：砂連尾 理、豊平 豪
 参加：医療やケアの関係者ら95名
 コーディネーター：セシリア・チャン

概要：豊平と砂連尾が、過去の映像資料を使ってこれまでの<とつとつダンス>及び<とつとつダンス>ワークショップの事例を紹介。その後、参加者2人1組になって5分間かけて握手するワークを実施した。最後の質疑応答の時間では、マレーシアの認知症介護の現場で日々強い問題意識を抱えている方々から、多岐にわたる熱心な質問や意見をいただいた。

砂連尾コメント：こういったダンスを通じた活動が認知症当事者の改善にどのような効果がもたらされるのかといった質問がある中、昨夏以来、マレーシア、日本をzoomで繋ぎ開催したオンラインワークショップにもほぼ毎回参加してくれていたアンナさんが「認知症の方に向けて取り組んだ薬物治療ではなかなか効果が見受けられない時、当事者が如何に穏やかな状態で過ごせるかを考えた時に、<とつとつダンス>のようなワークはとても良いのではないか」といった趣旨の発言をしてくれたことはとても嬉しかった。



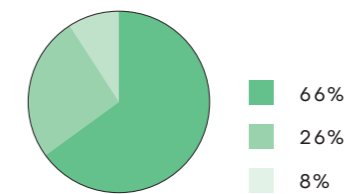
< とつとつダンス > マレーシア参加者アンケート

マレーシアと日本をつないだオンライン・ワークショップや、マレーシア渡航期間中に実施した2回のワークショップ、アートフェスティバル、大学でのレクチャーの参加者に向けてアンケートを実施。いただいた多くの感想・意見の中から一部を紹介する。

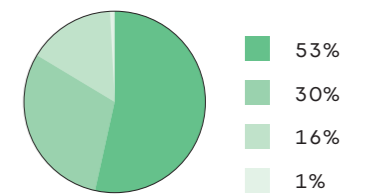
● 5段階評価での アンケート



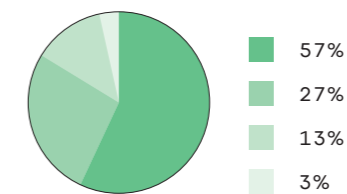
(1) 今回参加した<とつとつダンス>に満足しましたか?



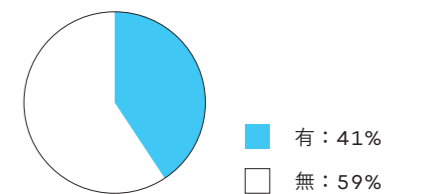
(2) 今回の<とつとつダンス>は今後のケアの参考になりましたか?



(3) マレーシアでの<とつとつダンス>に今後も期待しますか?



(4) 参加者の介護経験の有無



● オンラインでワークショップ に参加した方の声

4 年前に80代の母親が認知症と診断された。週1、2回介護している。<とつとつダンス>におけるカマルの音楽も、砂連尾のダンスもほんとうにクリエイティブで、インタラクティブでわかりやすかった。<とつとつダンス>は認知症介護にとっても助けになると思う。<とつとつダンス>がどのように認知症の母親に影響を与えるかは今はわからないが、砂連尾は良いインストラクターだと思った。親しみやすいし、エクササイズをしながら認知症の方と接する方法を理解している。

12 年前に現在80代の母親が認知症と診断された。以来、毎日24時間、12年間介護している。今回はワークショップ中に昼寝をしていて、母親は参加できなかったが、カマルの音楽は素晴らしく、私はワークに集中することができた。砂連尾のワークのやり方も腑に落ちるものがあった。<とつとつダンス>は私自身の介護にも変化を与えると確信している。参加できてほんとうによかった。

受け取り方は参加者によってさまざまであったが、次の展開を望む強い想いは共通していた。今後、マレーシア版<とつとつダンス>が形作られていくためには継続が必須となるだろう。

マレーシア渡航日記

神村 恵はダンサーとして、浦岡 雄介は福祉施設の一職員という立場から、ワークショップに参加した認知症の方の傍で関わってきた。異なる立場から<とつとつダンス>に加わった2人が、マレーシアで目にしたこと、感じたことを綴った。このテキストは、2人の日記の一部を制作スタッフの和田が編集したものである。

ルールと身体

神村 恵 (ダンサー・振付家)

2022年12月26日

オンラインでしか会ったことのないセシリアと対面。話を聞けば聞くほど、保険や介護制度の整っていない中で、今まさに自ら仕組みを作っているエネルギーに圧倒される。介護や保険制度の問題について話を聞く。認知症は恥ずかしい、隠すべきものという認識は、確かに今の日本にも少なからずある。仮に自分の親が認知症になったならば、恥ずかしいとは思わないだろうが、それを積極的に公開したいとは思わないだろうと思う。

2023年1月2日

ほぼ必ず中国人だと思われ中国語で話しかけられる。街中ではマスクをしている人が多いが、していないからといって非難の視線を向けられることがない。もちろん感染がもっと深刻になったらその雰囲気は変わるだろうが、基本的に人は人、自分は自分という原則が働いていることに居心地の良さを感じる。

2023年1月2日

14時前、ランドリーに出かける。機械の使い方がいまいちわからず、地元の人らしき女性に助けてもらう。洗剤までもらってしまった。彼女は他の旅行者らしきカップルにも洗剤をあげていた。別に仕事でも何でもないので、おそらくいつもそうやって、ランドリーに来る慣れない旅行者たちを助けてあげているのだろう。機械や設備はどこでも大体半分くらいは壊れているが、彼女のような人の柔軟な振舞いが挟まれることで、この国は回っているように思える。

マレーシアで 老人福祉を考えてみた

浦岡 雄介

(グレイスヴィルまいづる生きがい支援員)

2022年12月27日

現地コーディネーター、久貝さんの話。マレーシアでは老後の心配をする人は少ないんじゃないかということ。老人は家族で面倒を見るのが普通。それは習慣的なもの。赤ちゃんは地域、家族で育てるのが普通で、習慣。妊娠した時「子どもが生まれたら、あなたの世話は誰がするの?」と近所の人が母親を心配する。孤独にはならない、させない。その部分があるからマレーシアの老後がある。老後の心配とはお金よりも、孤独感・孤立感からくるのかもしれない。

2022年12月29日

とつとつダンスWSを通してわかってきたことは1対1で接することの大切さと、自分と相手の世界を作ること。それは「ふれ合う」ということの意味を問いただす作業ではないか。認知症になって認識があいまいになる。それを支えるのではなく、寄り添い彼らの世界へ入りこんでいく感覚。

砂連尾さんのダンス。「僕はおどるとき、今まで会って、そしてなくなっていった方のことを思いながら踊ります。」「一緒に公演するはずだった岡田さんがこれなかったとき、岡田さんに『あなたはもう一人で踊れますよ』とされている気がした」

2022年度活動報告展示会

日時：2023年2月25日

場所：さいたま市文化センター（埼玉県さいたま市）

鑑賞サポート：日本語字幕（映像記録）、

日英通訳・手話通訳（トークセッション）

来場者数：アート関係者、

介護福祉施設関係者など122名

概要：今年度の活動内容や成果を共有する活動報告展示会では映像展示を中心に、午後は活動に関わったアーティストやゲストとともに、<とつとつダンス>の一端を伝えるトークセッションを実施。最後に森隆一郎さん、三浦匡史さん、西川勝さんがそれぞれ進行をつとめる3つのグループに分かれ、来場者とグループディスカッション。会場にはアートやダンスに関心のある方々のほか、関東近郊で福祉や介護に関わる方にも多く足を運んでいただき、地域・アート・ケアの領域を横断した対話の場が生まれた。

*登壇者の
詳細はこちら→
(<https://torindo.net/news/2022report/>)



内容：

●これまでの活動に関する映像記録

①「からだにたずねて〜とつとつダンスをマレーシアへ〜」

撮影・映像編集 石田智哉、馬場光太

②「<とつとつダンス> 2009-2015」

映像 久保田テツ

③「<とつとつダンス>オンラインワークショップ2020」

映像編集 遠藤幹大

●オンラインワークショップ①②

進行：砂連尾理、神村恵

オンライン参加：①近藤キヨエ

(グレイスヴィルまいづる入居者)、浦岡雄介

②グリニス、グリニス母（マレーシア）

●トークセッション 2022年度の活動報告

出演：砂連尾理、セシリア・チャン、石田智哉、カマル・サブラン、豊平豪

●<とつとつダンス>ワークショップ体験

進行：砂連尾理、神村恵

●グループ・ディスカッション、振り返り

進行：森隆一郎、三浦匡史、西川勝



撮影：加藤甫

OriHime がもたらした感覚と 映像編集

今年度の<とつとつダンス>のマレーシア渡航の映像記録を依頼した石田 智哉は筋ジストロフィーによる電動車椅子ユーザーであり、新進気鋭の映画監督である。体調不良で今回の渡航に同行してもらうことがかなわなくなり、急遽、自宅から分身ロボットOriHime*で参加してもらうことになった。なお、本テキストは、石田が書いた日記の一部を制作スタッフの豊平が再構成したものである。

今回の分身ロボットOriHimeでのマレーシア渡航への参加は衝撃的なものだった。記録された映像と音声を通しての体験とは違う形で身体を惹きつける何かがある。そこにはあった。もの（他者・物体）との遠近感の違い、他者の反応の違い（そこには操作側が生み出せるアクションも関わって）、OriHimeから届く映像や音の質感（通信速度やぶれ等）。まるでOriHimeを通した別世界を味わっているようだった。

Zoom中継にはなくOriHimeだからこそ可能になったことといえば、自分が見たいものへと「視線を向けられる」ことだった。起きている、もの・ひと・ことに心がつかれて、自分の操作で「首」を動かせること。これは映像を「見た」、行われていることを「知った」とは異なる「身体全体でキャッチした」ような感覚に繋がった要素なのかもしれない。

映像作品とするには相応の画質と音質が必要であり、それが担保されなければ鑑賞に耐えられないことも理解できる。OriHimeの映像がそのまま利用できることはないかもしれない。しかしながらOriHimeによるコミュニケーションがもたらした「そこにいた」との感覚は、以降の映像編集に深く関わるだろう。

砂連尾さんと出会って以来、「自分にはどこか縁遠いもの」だと感じていたダンスが大きく近づいた。一人ひとりの身体の振る舞いの違いを「ダンス」として見ようとする力学によって、頭や身体の凝り固まったものがほぐされている気がする。今回はさらに「OriHime」という別の身体でダンスをするステージにさえ至った。OriHimeによる動きの拡張と制限は、これまでの「自分の身体」をある種の「頑なである変えられなさ」から解いてくれるものでもあった。

「映像作品を作ること」、より大きく言えば「表現する

こと」を自分はなぜ求めるのか。それは「自分とは違うものになろう（近づこう）とすること」への好奇心からである。言葉を綴りながら、あるいは映像を編集しながら「思考（試行）」しているのは常にこのことである。言葉の綴りや、映像制作は、どこか、そのときに自分になりたいもの、惹かれたものと一緒に「歩いている」感覚だったりする。呼吸であったり、疲れ具合だったり、ふと眼差すものが同じだったりしたときに身体に湧くものを大切にしたい。

自分の身体とOriHimeの身体の行き来、その変化に伴う不安定さや揺さぶりは自分の身体とは別の入れ物に心が入る経験だった。何かに「なろう」としたとき、自分の身体という、はまっているものからはなかなか抜け出せない。にもかかわらず、この渡航で幾度か、それが起きたことは刺激的だった。いつの間にか人がはまっている（はめられている）枠からひょいと抜け出す機会に出会えたこと。これは<とつとつダンス>という空間だからできたことなのかもしれない。

※『OriHime』は株式会社オリィ研究所の登録商標です



OriHimeを通し現地マレーシアでのワークショップを体験

インタビュー

石田 智哉 × セシリア・チャン

活動報告展示会にあわせ、セシリア・チャンが初来日。「デイサービス楽らく（クロスプレイ東松山）」（埼玉）など、国内で参考となる高齢者福祉施設等を見学する機会をもった。活動の背景や<とつとつダンス>の印象、日本での施設見学などについて、映画監督として<とつとつダンス>と伴奏してきた石田 智哉がインタビュー。

石田：ケアや老年学に関心を持った背景について教えてください。

セシリア：福祉の業界で働いて20～25年ほど経ちます。健康者の健康学からスタートして、国内の高齢者層が増えてきたことから、老年学に関心を持ちました。

石田：老年学を専門としているセシリアさんですが、はじめて介助をしたとき、どんな感想を抱きましたか？

セシリア：10代だった学生時代に、通っていた教会でボランティアをしたのが最初です。とてもショッキングで悲しい体験でした。介助する／される関係が明確かつ一律で、介助される人が非常に疎外感を感じるような環境だったんです。

石田：一時期まで、僕は介助してもらおうとき「すみません」と言うことが多かったんです。あるとき介助者に「すみませんじゃなくて、ありがとうと言ったほうがお互いの関係性が公平になるよ」と言われたことから、ありがとうなどの肯定的な言葉や動作に切り替えたことを思い出しました。そうすることで、気持ちの上で、疎外感や負担のようなものが減ってきたなと感じています。

石田：セシリアさんが運営しているマレーシアのパガン病院の高齢者ケアセンターでは、利用者さんとのような取り組みをしていますか？

セシリア：「J.O.Y=Just Older Youth」というプログ

ラムでは、デイケアのコンセプトとして、入所者一人ひとりの興味にあわせ、ダンスや歌、手遊び、時には料理などしっかりとプログラムを組んでいます。ほとんどの人が認知症を発症しているため、その方々が楽しんで、かつ、やりがいや生きがいになるようなプログラムにするのが大事です。介助者を対象として認知症に対する知識を深めたり、身体的な介助に対する意見交換なども行っています。

石田：特別支援学校でマンツーマンで先生とやりたいことをやる時間があって、iPadの操作などしていたのを思い出しました。他の人がどうケアされるのかということへの関心が強かったので、他の人が乗っている車椅子や食事介助、トイレ介助の仕方などを参考に、自分自身に対するより良い介助を探した末に、冊子《自分の介助の仕方》をつくったんです。

セシリア：私の施設の認知症の方々にも、そういった冊子があれば、介助してほしい内容、好きなものなど個人に合わせた介助やケアやサービスができますね。

石田：とつとつダンスを初めて見たとき、どう感じましたか？僕は初めて砂連尾さんと踊ったとき「トイレ介助のダンスをやってみよう」と言われて戸惑ったんです。でも同時に安心感というか、身体を安心して預けられるような感覚を覚えました。

セシリア：私も、先日ワークショップで砂連尾さんと踊ったときに同じように感じました。でも正直、最初にとつとつダンスを見たときは頭が非常に混乱しまし

た。何をやっているのか、何のためにやっているのか、何一つわかりませんでした。

石田：昨年末（2022年）にマレーシアで実際にワークショップやセッションをしてみて、どうでしたか？

セシリア：クリスマスと新年の翌日の開催だったので、集客が心配でしたが、大勢の方に参加していただけました。最初のワークショップは、2人の認知症の人とその家族を対象に、バガン病院高齢者ケアセンターの中で、非公開でやりました。

砂連尾さんがいきなり床に座って話をするとところから始めたので、マレーシアではあまり床に座る習慣がないこともあって、みんな意図がわからず戸惑っていました。最初は砂連尾さんがリードしているように見えたのですが、砂連尾さんのゆっくりな動きに対して、一人の方がせっかちなため、動きがすごく早くなって、結果的にリードしているような形になったんです。それがすごくおもしろかった。ぎこちなさがどんどんなくなっていきような感じがしました。

公開ワークショップは、違う団体のプロデューサーやケアの専門家、大学生などいろいろなバックグラウンドを持つ100人ほどが集まって、病院の敷地内で行われました。熱心に質問が飛び交い、このプロジェクトにすごく興味を持ってきていました。



左から 石田智哉(映画監督)、
セシリア・チャン(ジェロントロジスト[老年学博士])

石田：日本で施設見学をしようとしたか？

セシリア：「デイサービス楽らく」では、皆すごく静かで穏やか、健やかに過ごしていることに驚きました。外国人で、かつ見知らぬ人という立場で行ったにも関わらず、暖かく受け入れてくれる環境がつけられているんです。日本はテクノロジーの国という印象がありますが、人と人のつながりでできていることに感銘を受けました。きれいに塗り絵をしている方に「とても上手ですね」と何回か声をかけても返事がなくて、でもそれは受け入れられているような感じがして、実際には会話が成立していないとしても、それはそれで良いと思えました。

石田：最後に、今回の経験をどのようにいかしていきたいですか？

セシリア：マレーシアで通用するなら世界でも通用するということだと思うので、自国はもちろん、<とつとつダンス>を世界中に向けて発信していきたいと思っています。

視察訪問

2023年2月下旬、報告会の実施に合わせてマレーシアとともに活動を進めたセシリア・チャンとカマル・サブランが来日。認知症介護における日本での先進的な事例を視察し、ワークショップも開催した。期間中に訪問した施設は以下の通り。

- 2月21日 サービス付き高齢者向け住宅「そばの家S王子神谷」(東京都足立区)
WS参加：施設に入居する高齢者10名
- 2月22日 立教大学新座キャンパス(埼玉県新座市)
WS参加：「映像身体学科」に所属する学生25名程度
- 2月24日 通所介護事業所「デイサービス楽らく」(埼玉県東松山市)
- 2月26日 地域共生文化拠点「春日台センターセンター」(神奈川県愛甲郡)



立教大学新座キャンパスでのカマルが奏でる音楽に合わせた学生たちによるインプロビゼーション



「そばの家S王子神谷」ワークショップ



「デイサービス楽らく」視察訪問
セシリアが制度や取り組みについて熱心に質問



立教大学新座キャンパスでのグレイスヴィルまいづる入居者と学生たちとのオンライン・ワークショップ



「デイサービス楽らく」視察訪問
塗り絵をする方と会話をする砂連尾、神村

インタビュー

砂連尾 理 × カマル・サブラン × 神村 恵

2020年、コロナ禍をきっかけに<とつとつダンス>が舞鶴と東京を繋いだオンラインワークショップへと切り替わった。そこに、マレーシアからカマル・サブランが音楽担当として参加。今年度、マレーシアと日本、オンライン&対面どちらも駆使しワークショップを続けてきた砂連尾理、神村恵、カマル・サブランにインタビューを行なった。

(インタビュアー：豊平 豪、通訳：福森 ちえみ、編集：和田 真文)

Q. 認知症をめぐる環境は、日本とマレーシアでどのような違いがありますか？

カマル：マレーシアでは現在、報告が上がっているだけで、20万人程の認知症の方がいると言われています。今は平均年齢が若いマレーシアも、十年後には高齢化が進んでいるでしょう。超高齢化社会と言われる日本から、サービスや考え方などの価値観を変えていかなければいけないと思っています。

Q. これまでカマルは「音楽と認知症」というテーマでやってきましたが、今回とつとつダンスと一緒にやってみて、どうでしたか？

カマル：身体という要素が加わることで、聞く、見る、動く、触る、全感覚が入って、認知症の方々の記憶を呼び起こしたり、新しい感覚に多大な影響を及ぼしたりするんだと発見がありました。



左から 砂連尾 理(ダンサー・振付家)、カマル・サブラン(アーティスト、研究者)、神村 恵(ダンサー)

Q. 今日、最後に即興で、カマルの音楽に合わせて砂連尾さん、神村さん、学生が踊るセッションをしましたが、どういうところからインスピレーションを得て音を出していましたか？

カマル：音楽家になる前にやっていた画家としての経験が生きていると思います。例えば町の風景だったら街全体を見るように。ひとつのものに注目するんじゃなくて全体を見ています。今日もどちらかというと全体の中でダンサーの動きや全体像を把握して、音を引き出しています。

Q. 砂連尾さん、神村さんはオンラインでカマルとセッションして、その後マレーシアや日本で実際に会ってセッションもしましたが、違いなどは感じましたか？

砂連尾：いつも特に何もプランを決めないまま<とつとつダンス>をやるんですが、カマルは、「合わせるよ」って感じで、ゆったりと待ってくれるんです。実際に会ってセッションしたときの方がそれを強く感じたね。時に音楽が場を支配してしまうことがあると思うけれど、それをせずに待ってくれるのは、場をつくるのにすごく大きい要素ですね。カマルが「私の語り」じゃなくて、そこにいた参加者との我々の語りをつくっていくことに併走してくれる。だから認知症の人も一緒に参加できたんじゃないかと思うし、僕一人ではできないことだったと思います。

神村：先日「そんぼの家S王子神谷」でワークショップをやったとき、その場で分かりやすい成果を引き出すというより、とにかくコミュニケーションをとって、相手からまず信頼感を引き出す、本当にそれに尽きるんだなと感じました。そのプロセスとして、会話や動き、音楽があって、展開されていくんだなって。カマルが即興で音楽をつくるときに漠然と全体の設計図を描いて、その上で細部をつくっていくと話していましたよね。オンラインでも対面でも、土台をつくってくれる人がいることで、ダンスをする側も安心感があるなと感じました。

カマル：やっていること自体がポストダンスだという

意識でセッションに臨んでいました。もうアート自体の存在はエンターテインメントとしてだけではなくて、誰かのために誰かを幸せにしたり誰かの存在価値をそこに見出すということが、ダンスやアートなんじゃないかな、と。

Q. <とつとつダンス>は、アート×福祉でもなく、ダンス×福祉でもない、その合間を縫って13年間つづけてきたわけですが、今年度は砂連尾さんだけでなく神村さんも入って、しかも舞鶴だけでなく関東圏でも、さらにはマレーシアでもワークショップを展開してきました。その可能性や感想などあれば。

神村：ケアのためのアートとか、アートの題材としてケアを使うとか、どちらかに傾く危険性ももちろんあると思います。ここではそうではなくて、何か名前のつかないことをどんどん探していくってこと自体、自分自身の活動を展開していくときに、それがそのまま指針にもなるかなと思って。

砂連尾：僕自身がここで目指したい関係は、例えば、私も参加者も、どちらも与え・与えられる関係になることなんです。その関係をつくるには、単発のワークショップでは難しい。長時間やることで、当初やっていたこととは別の動きが勝手に参加者から生まれてくる。そこから生まれてくる関係性があると思っています。そこに、神村さんやカマルやセシリアのような新たな人が加わることで、より違う話法や対話、身振りが生まれていく。世界中でこういう考え方を実践しようとしている人と出会ったことで、より<とつとつダンス>が広がっていく可能性を持ってたんじゃないかと思っています。

終わりに

認知症高齢者とダンスを踊る。〈とつとつダンス〉がはじまってもう14年目になる。京都府舞鶴市の特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるのご厚意で、ひっそりと同じ場所で、いつも一定のリズムで、ステップを踏み続けた。〆切もなかったので急ぐことはなかったけれど、とつとつと、着実に響かせてきたと思う。たまた「ダンス公演」という形で、よその人にみてもらう機会はあったけれど、基本的には施設の認知症の入居者と職員と砂連尾理とぼくらのひどく個人的な作業だった。

ひとつの場所で集中して踊っているうちに、当然それなりの哲学は生まれ、何かしらの技術も磨かれてきた。何より時代も変わった。ぼくらは自然に「そろそろ他の場所でステップを踏む段階に来た」と、今回マレーシアへと向かうことになった。

さて、マレーシアへと足を踏み出した〈とつとつダンス〉だったが、想定外のことが（ある意味で想定通りに）数多く起こった。例えば、ぼくらは認知症の方との出会いを求めて日本のような高齢者施設を探したのだが、ぼくらがイメージする施設はマレーシアにないようだった。基本的にそれぞれの家庭が抱えるプライベートな問題として認知症と向き合っている。これではどこか施設を紹介してもらって、施設の職員とともにダンスワークショップを行うやり方はうまくいかない。今回は幸運なことに数組の認知症の方とその介護者と出会うことができ、素晴らしい体験を共有することができたが、今後はやり方を考えなければならないだろう。

またマレーシアの人たちの新しい認知症ケアを求める熱量にも圧倒された。〈とつとつダンス〉を説明した際の来場者からの質問の切迫さには目を見張るものがあった。だとしても、単なる短期来訪者にしか過ぎないぼくらが各家庭をまわって踊るわけにはいかない。砂連尾理がいなくてもとつとつという音を響かせるやり方はあり得るのだろうか。

来年度以降は、舞鶴以外の多くの場所で〈とつとつダンス〉を踊る仲間を求めてみようと思う。具体的にはマレーシアやシンガポールのダンサーや、コミュニティベースで活動を進めているアーティストとも連携を探してみたい。日本各地にも目を向けてみたい。耳を澄ましさえすれば、世界のいたるところで、いろいろなとつとつが聞こえてくるはずだ。

一般社団法人 torindo 豊平豪

● 参加アーティスト

砂連尾 理、神村 恵、カマル・サブラン

● 映像制作

石田 智哉

● 映像撮影

馬場 光太

● トークセッション撮影・編集

松崎 萌子

● 報告展示会チラシデザイン

横田 法哉

● 翻訳

久米 明子、福森 チエミ、石居 萌

● ワークショップ・コーディネート

カマル・サブラン、セシリア・チャン、浦岡 雄介、仲井 なるみ

● マレーシア・コーディネート

久貝 京子

● 制作統括

豊平 豪

● 制作

横田 紗世、和田 真文

● 広報

関 萌美

● 主催

文化庁、一般社団法人 torindo



● 協力

イズマイル・ラサ、西川 勝、森 隆一郎、三浦 匡史、新妻 葉子、関 俊太、特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづる、アーツカウンシルさいたま、立教大学現代心理学部映像身体学科、バガン病院（高齢者ケアセンター）、国立マレーシア科学大学、イポー・ヒーリング・アート・フェスティバル、国際交流基金クアラルンプール日本文化センター、デイサービス楽らく、そんぼの家S王子神谷、春日台センターセンター

● 関連リンク

一般社団法人 torindo

ホームページ
<https://torindo.net/>



Facebook ページ
<https://www.facebook.com/series.totsutotsu>



とつとつマガジン (note)
https://note.com/totsutotsu_dance/



〈とつとつダンス〉
YouTube ページ
<https://www.youtube.com/@totsu-totsudance9801>



砂連尾 理 ホームページ
<https://www.jareo-osamu.com/>



<とつとつダンス>

2022年度活動報告書

発行日 2023年3月25日
発行 一般社団法人 torindo

編集 豊平 豪、和田 真文、横田 紗世

デザイン 垣内 晴

写真撮影 加藤 甫(P.11)

文化庁委託事業「令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業」
『日本からマレーシア、アジア太平洋へ～認知症患者・高齢者と介護者をつくる
「アートのような、ケアのような《とつとつダンス》』』

